
【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ

(例) 海月《くらげ》や

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

(例) 三四人|居《を》りました。

／＼：二倍の踊り字（「く」を縦に長くしたような形の繰り返し記号）

(例) ばさ／＼した

このおはなしは、ずみぶん北の方の寒いところからきれぎれに風に吹きとばされて来たのです。氷がひとでや海月《くらげ》やさまざまのお菓子の形をしてゐる位寒い北の方から飛ばされてやって来たのです。

十二月の二十六日の夜八時ベーリング行の列車に乗つてイーハトヴを発《た》つた人たちが、どんな眼《め》にあつたかきつとどなたも知りたいでせう。これはそのおはなしです。

×

ぜんたい十二月の二十六日はイーハトヴはひどい吹雪でした。町の空や通りはまるつきり白だか水色だか変にばさ／＼した雪の粉でいつぱい、風はひつきりなしに電線や枯れたポプラを鳴らし、鴉《からす》なども半分凍つたやうになつてふら／＼と空を流されて行きました。たゞ、まあ、その中から馬そりの鈴のチリンチリン鳴る音が、やつと聞えるのでやつぱり誰《たれ》か通つてゐるなといふことがわかるのでした。

ところがそんなひどい吹雪でも夜の八時になつて停車場に行つて見ますと暖炉の火は愉快に赤く燃えあがり、ベーリング行の最大急行に乗る人たちはもうその前にまつ黒に立つてゐました。

何せ北極のぢき近くまで行くのですからみんなはずつかり用意してゐました。着物はまるで厚い壁のくらゐ着込み、馬油を塗つた長靴《ながぐつ》をはきトランクにまで寒さでひびが入らないやうに馬油を塗つてみんなほう／＼してゐました。

汽罐車《きくわんしゃ》はもうずつかり支度ができて暖さうな湯気を吐き、客車にはみな明るく電燈がともり、赤いカーテンもおろされて、プラットホームにまつすぐにならびました。

『ベーリング行、午後八時発車、ベーリング行。』一人の駅夫が高く叫びながら待合室に入つて来ました。

すぐ改札のベルが鳴りみんなはわい／＼切符を切つて貰《もら》つてトランクや袋を車の中にかつぎ込みました。

間もなくパリパリ呼子が鳴り汽罐車は一つポーとほえて、汽車は一目散に飛び出しました。何せベーリング行の最大急行ですから実にはやいもんです。見る間にそのおしまひの二つの赤い火が灰いろの夜のふゞきの中に消えてしまひました。こゝまではたしかに私も知つてゐます。

×

列車がイーハトヴの停車場をはなれて荷物が棚《たな》や腰掛の下に片付き、席がすっかりきまりますとみんなはまづつくづくと同じ車の人たちの顔つきを見まはしました。

一つの車には十五人ばかりの旅客が乗つてゐましたがそのまん中には顔の赤い肥《ふと》つた紳士がどつしりと腰掛けてゐました。その人は毛皮を一杯に着込んで、二人前の席をとり、アラスカ金の大きな指環《ゆびわ》をはめ、十連発のぴかぴかする素敵な鉄砲を持つていかにも元氣さう、声もきつとよほどがらがらしてゐるにちがひないと思はれたのです。

近くにはやつぱり似たやうなりの紳士たちがめいめい眼鏡《めがね》を外したり時計を見たりしてゐました。どの人も大へん立派でしたがまん中の人にくらべては少し瘦《やせ》てゐました。向ふの隅《すみ》には瘦た赤ひげの人が北極狐《ほくきよくぎつね》のやうにきよとんとすまして腰を掛けこちらの斜《はす》かひの窓のそばにはかたい帆布《はんぷ》の上着を着て愉快さうに自分にだけ聞えるやうな微《かす》かな口笛を吹いてゐる若い船乗りらしい男が乗つてゐました。そのほか瘦て眉《まゆ》も深く刻み陰気な顔を外套《ぐわいたう》のえりに埋てゐる人さつぱり何でもないといふやうにもう睡《ねむ》りはじめた商人風の人など三四人 | 居《を》りました。

×

汽車は時々素通りする停車場の踏切でがたつと横にゆれながら一生けん命ふゞきの中をかけました。しかしその吹雪もだん／＼をさまつたのかそれとも汽車が吹雪の地方を越したのか、まもなくみんなは外の方から空気に圧《お》しつけられるやうな気がし、もう外では雪が降つてゐないといふやうに思ひました。黄いろな帆布の青年は立つて自分の窓のカーテンを上げました。そのカーテンのうしろには湯気の凍り付いたぎらぎらの窓ガラスでした。たしかにその窓ガラスは変に青く光つてゐたのです。船乗りの青年はポケットから小さなナイフを出してその窓の羊齒《しだ》の葉の形をした氷をガリガリ削り落しました。

削り取られた分の窓ガラスはつめたくて実によく透とほり向ふでは山脈の雪が耿耿《かうかう》とひかり、その上の鉄いろをしたつめたい空にはまるでたつたいまみがきをかけたやうな青い月がすきつとかゝつてゐました。

野原の雪は青じろく見え煙の影は夢のやうにかけたのです。唐檜《たうひ》やとゞ松がまつ黒に立つてちらちら窓を過ぎて行きます。じつと外を見てゐる若者の唇《くちびる》は笑ふやうに又泣くやうにかすかにうごきました。それは何か月に話し掛けてゐるかとも思はれたのです。みんなもしんとして何か考へ込んでゐました。まん中の立派な紳士もまた鉄砲を手に持つて何か考へてゐます。けれども俄《にはか》に紳士は立ちあがりました。鉄砲を大切に棚《たな》に載せました。それから大きな声で向ふの役人らしい葉巻をくはへてゐる紳士に話し掛けました。

『何せ向ふは寒いだらうね。』

向ふの紳士が答へました。

『いや、それはもう当然です。いくら寒いと云つてもこつちのは相対的ですがなあ、あつちはまだ絶対です。寒さがちがひます。』

『あなたは何べん行つたね。』

『私は今度二遍目ですが。』

『どうだらう、わしの防寒の設備は大丈夫だらうか。』

『どれ位ご支度なさいました。』

『さあ、まあイーハトヴの冬の着物の上に、ラツコ裏の内外套《うちぐわいたう》ね、海狸《びばあ》の中外套ね、黒狐《くろぎつね》表裏の外外套ね。』

『大丈夫でせう、ずゐぶんいゝお支度です。』

『さうだらうか、それから北極兄弟商会パテントの緩慢燃焼外套ね.....。』

『大丈夫です』

『それから氷河鼠《ひようがねずみ》の頸《くび》のこの毛皮だけでこさへた上着ね。』

『大丈夫です。しかし氷河鼠の頸のこの毛皮はぜい沢ですな。』

『四百五十 | 疋《びき》分だ。どうだらう。こんなことで大丈夫だらうか。』

『大丈夫です。』

『わしはね、主に黒狐をとつて来るつもりなんだ。黒狐の毛皮九百枚持つて来てみせるといふかけをしたんだ。』

『さうですか。えらいですな。』

『どうだ。祝盃《しゆくはい》を一杯やらうか。』紳士はステームでだんだん暖まつて来たらしく外套を脱ぎながらウエスキーの瓶《びん》を出しました。

すぢ向ひではさつきの青年が額をつめたいガラスにあてるばかりにして月とオリオンとの空をじつとながめ、向ふ隅《すみ》ではあの瘦《やせ》た赤髯《あかひげ》の男が眼をきよろきよろさせてみんなの話を聞きすまし、酒を呑《の》み出した紳士のまはりの人たちは少し羨《うらや》ましさにこの豪勢な北極近くまで獵に出かける暢気《のんき》な大将を見ておました。

[...]

底本：「新修宮沢賢治全集 第十三巻」筑摩書房

1980（昭和55）年3月15日初版第1刷発行

初出：「岩手毎日新聞」

1923（大正12）年4月15日

※「ウエスキー」と「ウキスキー」、「眠る」と「睡る」の混在は底本通りにしました。

入力：マイマイマイ

校正：小林繁雄

2005年2月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。